第３回「つづり方のポイント①　～「ん」「っ」区切りの符号など～」

ナレーション：
令和７年の内閣告示「ローマ字のつづり方」改定でのポイントとなる
「撥音（はつおん）」「促音」「区切りの符号」、そして「固有名詞の最初は大文字で書くこと」、
「国際的に普及しているものなど、各分野で用いることのある表記」について解説します。

女性：
今回は、具体的なつづり方のポイントを見ていきます。
まずは撥音、「はねる音」の「ン」からです。
撥音は一律に「n」で書く、とされています。

男性：
ここは重要ですね。
ヘボン式の一部のつづり方では、「kampai（乾杯）」のように、
「b、m、p」の前の撥音「ン」を「m」とする書き方が見られます。
しかし、調査の結果、このようなつづり方は
十分に定着しているとは言い難く、採用されていません。
日本語を主に使う人にとっては音の区別が難しいため、
できるだけ複雑にならない考え方になっています。
その結果、撥音「ン」は一律に「n」で書く、という整理になったわけですね。

女性：
そのとおりです。
続いて、促音、小さい「ッ」で書く「つまる音」です。
促音は、例に示すように、子音字を重ねて表します。
なお、子音字が二文字の場合は、最初の字、sh の s、ch の c などを重ねます。

男性：
なるほど。「nicchoku」のように「c」を重ねる形ですね。
これも一部の書き方では、「nitchoku（日直）」のように、
「ch」の前の促音を「t」で表す例も見られますが、採用されていません。
調査の結果、撥音と同じく、こうしたつづり方が十分に定着しているとは言い難いことが分かり、
できるだけ複雑にならない考え方になっています。

女性：
そして三つ目が、
音の切れ目を示す「’」（アポストロフィー）です。
「’」（アポストロフィー）がないと、

例えば「単位」が「tani（タニ）」となってしまい、
別の語として読まれるおそれがあります。
音の切れ目を明確にするために用います。

男性：
また、複数の語などで構成される語を分けて書く場合には、
「-」（ハイフン）を用いることができる、とされています。
なお、「-」（ハイフン）は、必ず使わなければならないものではなく、
用いた方が分かりやすくなるような場合に限って用いるとよいでしょう。

女性：
はい。ここで、もう一点確認しておきましょう。
地名や人名などの固有名詞は、原則として、
語の最初の文字を大文字で書くこととされています。

男性：
文章の中でも、固有名詞であることが分かりやすくなりますね。

女性：
また、国際的に普及しているものなど、各分野で用いることのある表記については、
すぐに変更を求めるものではないとされています。

男性：
これらは、二つの書き方が見られるものですね。
今回の改定では、そうした各分野における使用実態を踏まえ、
混乱を避けるため、無理に書き換えるべきものではない、
という考え方が示されています。

女性：
新しい考え方と、これまで積み重ねられてきた慣用との関係が整理して示されていますね。

男性：
撥音や促音、記号の使い方、そして固有名詞や慣用的な表記の扱い。
これらは、正確に伝えるため、
また、できるだけ複雑にならないための整理と言えそうですね。

女性：
次回は、今回の改定でも特に注目されている
「長音」について見ていきます。